

十一月

よ  
し  
こ

十一月冷き秋の音たて、桐の落葉はさらさらとゆく  
氣づかざりうす紅の山茶花はよき姿して秋を愛でぬ  
佳き人の薰香のごと秋たけし雨の夜道にかをる木犀  
十歳の子が種まきし花コスモスはすく／＼のびて秋をうたへる  
そのまゝに染めて仕立て、生みし子のたもとに見たき大輪の菊  
せがまれて厚紙與ふ六つの子は飛行機つくりぬ神わざのごと  
さくら貝五つならべし指の子は描き居り晝用紙一ぱいに  
足跡を縁にのこしてめりんすの床にふか／＼ねむれり幼き子  
物愛づる身の幸を忘れ來ず生れいでしを子の性にみる  
紅筆の紅がほしとて西京へ旅する人をまちてゐるかな